

棚田学会通信

第37号 2012年6月20日
 発行/棚田学会
 〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8
 東京農工大学農学部千賀研究室内
 TEL:042-367-5758 FAX:042-385-1180



熊本県山都町「峰棚田」(写真提供:山都町役場)

◆巻頭言.....2
 「びわ湖源流の郷たかしま」のまちづくり
 ～水を養い水と暮らし水でつながる高島～.....滋賀県高島市長 西川喜代治

◆会員通信.....3
 富士常葉大学・棚田保全ボランティア活動—援農活動から地域おこしへの挑戦—
富士常葉大学 山本 早苗
 「棚田の中のカカシ」～長岡市比礼カカシ・プロジェクト～.....長岡造形大学 上野 裕治
 豊岡市における“コウノトリ”をシンボルとした環境創造型農業の取組
兵庫県但馬県民局 豊岡農業改良普及センター 矢崎 雅則

◆現地からの便り.....6
 GIAHS(世界農業遺産)としての棚田.....(社)佐渡生きもの語り研究所 土屋 健一

◆日本の棚田百選紹介.....7
 熊本県山都町の「峰棚田」.....峰棚田代表 高森 信之

◆棚田写真集.....8

事務局ニュース

- 2012年度棚田学会大会のお知らせ
- 編集後記

巻頭言

「びわ湖源流の郷たかしま」のまちづくり
～水を養い 水と暮らし 水でつながる高島～

滋賀県高島市長 西川 喜代治

【高島市の概要】

私たちのまち高島市は滋賀県の西部に位置し、人口は52,486人、世帯数は18,132世帯（平成22年国勢調査）、総面積は693km²（湖面を含む）、東部は琵琶湖に、南西部は比良山地を境に大津市および京都府に、北西部は、野坂山地を境に福井県に接しています。

古来、当地域は京都・奈良の都と北陸を結ぶ交通の要衝であり、中でも陸上交通は比叡・比良山麓を湖畔に沿って走る西近江路や、塩漬けされた鯖を運搬する街道であったことから、鯖街道と呼ばれる若狭街道が主となり、これらの街道と大津方面への湖上交通の拠点である港町や宿場町として栄えてきました。

また、近江聖人と称えられた日本陽明学の始祖、中江藤樹先生生誕の地として知られているとともに、数多くの高島商人（近江商人）を送り出した土地柄でもあります。

【びわ湖源流の郷たかしま戦略】

県内最大の面積を有する本市は、琵琶湖へ注ぐ水の3分の1を生み出す地域です。森林と平野、琵琶湖が、何本もの川によって結ばれ、豊かな自然の恵みを楽しむ中で、「畑の棚田」をはじめ、魅力あふれる地域固有の生活文化や地場産業が発展してきました。

本戦略は、市内の生物多様性の保全と持続可能な利用を図ることによって、産業振興と地域の活性化を推進し、高島ならではの生物多様性を次世代に継承していくとするもので、奥山から湖まで様々な環境が広がる本市を「里山（さとやま）・里住（さとすみ）・里湖（さとうみ）」と3つのエリアに分け、市民が地域に誇りを感じることで、「水を養い 水と暮らし 水でつながる高島」の実現を目指します。

【畑の棚田保全の取り組み】

畑地区は、高島市の西南部に位置しており、面積約15.4ha、大小359枚、平均勾配1/7の棚田が、比良山系の山裾に美しい幾何学模様を描き広がります。

この畑の棚田は、平成11年7月に滋賀県で唯一「日本の棚田百選」に認定されました。当地区の高齢化率は46.7%で、農業従事者の平均年齢が74歳に達していることなど、棚田保全の取り組みが地区住民の負担増となる懸念もありましたが、「先人が苦勞して山間地を切り開いて広げた棚田を保存・保全しなければ」との強い思いから、平成12年に地区全員が加入する「畑区 畑の棚田保存会」が設立されたものです。

また、地区内だけでの取り組みには限界があること

から、都市住民に参画を募り、①棚田オーナー制度、②棚田ボランティアの受け入れ、③大学や民間企業との連携等、幅広い交流を図りながら棚田を保全していく取り組みが続けられています。

さらに、棚田米のブランド化や棚田味噌、漬物、耕作放棄地を活用しての山菜の栽培など特産品開発にも取り組まれているところです。

①については、棚田オーナーとして農作業に従事される都市住民の方々に作業量を選んでいただけるよう「おまかせコース」、「こだわりコース」、「超こだわりコース」、「酒オーナーコース」の特徴ある4つのコースが設定されています。

秋には収穫祭を開催し収穫米や地区の特産品を提供するなど様々な工夫をこらし、棚田の保全・活用に取り組まれています。

②、③については、棚田保全に意欲のあるボランティアの方々や、企業の社会貢献活動として社員の方々の受け入れ、地域住民との交流を図りながら、休耕地、耕作放棄地の草刈りや水路清掃などが行われています。

また、京都精華大学と連携し、棚田保全への参画のほか、地域の機関紙や散策マップ作成などが行われ、保全活動に活用されています。



畑の棚田で「お手伝い」

【結びに】

このように畑の棚田は、広大な市域の中でも特に里山の原風景が色濃く残る、本市の「宝」の一つに数えられる地域であります。

人間が多様な生物と共生していくには、単に自然を守るだけでなく、日々の暮らしの中でそれらを大切に想い、行動を起こすことによって形を成し、地域の活性化にもつながっていくと考えます。

「びわ湖源流の郷たかしま」の里山、里住、里湖に広がる豊かな自然や生き物の恵み、生活文化、地場産業などを、いつまでも後世に引き継いでいけるよう、畑の棚田の保全活動をはじめ様々な活性化戦略を展開してまいりたいと考えております。

会員通信

富士常葉大学・棚田保全ボランティア活動 —援農活動から地域おこしへの挑戦—

富士常葉大学 講師 山本 早苗

入り組んだ湾が連なる西伊豆の海岸線と静かに佇む富士山を眺めることのできる絶景の棚田が、松崎町石部で復元されてから10年以上の月日が流れた。石部と近隣の二集落をあわせて「三浦（さんぼ）」と呼び、いまは廃校となった三浦小学校が石部棚田へとつづく急峻な道の脇で人の訪れを待ちわびている。

静岡県東部・富士山麓に位置する富士常葉大学では、大学・地域連携事業の一環として、2004年から松崎町石部で棚田保全ボランティア活動に取り組んできた。本活動は、環境防災教育の場としての棚田に着目し、地域の生業（なりわい）を学びながら、農山村が置かれている状況や直面している問題を理解して、その問題解決にむけて実践できる力を養うことを目的としている。本活動は、2007年に、人手を必要とする農山村と地域貢献をしたい企業や大学とをマッチングする「一社一村しずおか運動」に認定され、大学と地域住民が協働した棚田保全活動としては県内で初めて認定を受けるにいった。



駿河湾を眺めながら農作業。あぜ切り後は、棚田の輪郭がクッキリ

本学の活動は、田植えや稲刈りなどのイベント性が高い活動ではなく、高齢化が進み地元の負担が増えた棚田農業の下ごしらえや日々の手間ひまかかる農作業の支援を目的にしている。具体的には、河津桜がちらほらと咲きはじめる2月に、地元で「前腹切（まえっばらぎり）」と呼ばれる「畦切り」を行い、前年つけた畦を鍬で取り除いてゆく。4月になると、代かき後の水田で泥んこになりながら、畦を丁寧に

ぬり固める「畦塗り」を行い、田植えにそなえる。8月には、猛暑の中、大きく成長した稲穂の合間を縫うように水田の中にビッシリと生い茂った雑草や藻の「草取り」と畦の「草刈り」を行い、田んぼの隅から隅まで水が行き渡るようにする。

畦切りや畦塗りは、ほかの地域の棚田保全活動でもなかなか体験できない本格的な農作業で、学生たちにとっては得がたい経験となっている。鍬一本、鎌一本のみでの農作業を通じて、学生たちはじっくり土と向きあい、季節ごとの棚田農業の苦労と楽しみを学ぶ。学生たちにとっては、大学では知ることのできない貴重な学びの場となるとともに、地元の方たちとの世代を超えた交流の場にもなっている。

本学の棚田保全ボランティア活動が、来年で10周年を迎える節目となるにあたり、地域の経験や記憶について丹念に聞き書きをはじめるとともに、これまでの援農活動をさらに展開させて新たな地域おこしを試みている。地域の有志の方たちと一緒に、海・山・里をつなぐというテーマで、さまざまな人びとが集い交流する場（市場）づくりとして「Tanada de Marche」（棚田でマルシェ）を計画している。地域のこだわりの農産物や里山と棚田の恵みを生かした四季折々の加工品などの物産販売を行いながら、大学・地域連携による新たな商品開発にもつなげてゆきたいと考えている。将来的には、廃校となった三浦小学校をビジターセンターとして活用することも含めて、石部棚田が抱えている課題と多くの可能性を地域の方たちとともに考えながら、それぞれの思いや希望を形にしてゆくことができると考えている。



「地元の方の指導を受けて畦切り実践」

【本活動についての問い合わせ先】

富士常葉大学 社会環境学部 講師 山本早苗
TEL/FAX：0545-37-2141
E-mail：syamamoto@fuji-tokoha-u.ac.jp

「棚田の中のカカシ」 ～長岡市比礼カカシ・プロジェクト～

長岡造形大学教授 上野 裕治

「比礼カカシ・プロジェクト」は2009年に始まり3シーズンを経過した。このプロジェクトは、長岡市栃尾地区にある比礼集落の農家が棚田に数本のカカシを立てたのをきっかけに、この集落に居住し長岡造形大学に勤務している私が田んぼの所有者の了解を得て、学生とともにカカシの本数を増やしていったことから始まった。3年目となった2011年度は年度初めの集落総会で、区長以下役員ならびに住民の賛同を得て「比礼国際カカシ・コンクール2011」という名の下に集落事業として展開することとなった。「国際」と名前はついたものの、今のところ地元の学生たちだけであって、そのうちきっと国際的になるだろう、という希望が含まれたものだ。このような経緯から、カカシを通して比礼集落と長岡造形大学学生との交流を図ってきたわけであるが、今後は栃尾地域の幼稚園、小中学校生徒、長岡市内の一般市民や在留外国人、さらには首都圏を含めてあらゆる人々の参加へと拡大してゆこうという壮大な計画を持っている。このカカシ・プロジェクトによって、栃尾地域の農村景観・環境のすばらしさをアピールするとともに、農村と都市の交流活性化を進展させてゆくことになれば、発起人としては大変うれしく思う。



栃尾の「比礼の棚田」

ところでカカシっていったい何なんだろう？ カカシに関する文献はあまりないが、1800年代の文献には現れているようで、いずれにしろ相当昔から立てられていたようだ。そして、カカシは人型で立っていて、さも農作業をやっているかのように見せかけ、鳥を追い払うのが目的であると一般的には思われている。しかし本当にそうだろうか？ カカシと

スズメ、カカシとカラスなど鳥や動物たちと仲の良い友達として童話にもたくさん出てくるし、宮崎駿監督の「ハウルの動く城」、海外作品では「オズの魔法使い」で人々の友達として登場する。私もカカシを立てて毎日見てみたが、カラスの子が飛び立つ練習台にはなっていない、鳥を追い払う役目があるとはあまり思えない。農家の人達も、昔から本当はカカシに鳥を追い払う効果があるとはほとんど思っていなかったのではないだろうか。ならばカカシの役目はいったい何なのか？ 田んぼの農作業では、田植え、稲刈りは親戚一同も参加して賑やかなケースが多いが、その間の田の草刈り、畔の草刈りなどは孤独な作業だ。そんなときにカカシが立っていると、一瞬でもホッとするような気がする。無言の話相手というか、要は、カカシは「農作業の友」なのだと思う。そうであるならば、カカシはもっと自由であっていい、楽しいものであっていい、というわけで比礼カカシ・プロジェクトでは、写真にあるように楽しいカカシを制作してきている。テーマは「人か動物を抽象化する」ということとし、できればそこに何かのストーリー性を感じさせることができれば申し分ない。たとえば犬を追いかけるオヤジ、田んぼを覗く生まれたての子馬、などなど。今年もきっといろんなカカシ達が勢揃いすることになるだろう。



「カカシは楽し」



カカシ「天女」

豊岡市における “コウノトリ”をシンボルとした 環境創造型農業の取組

兵庫県但馬県民局 豊岡農業改良普及センター
コウノトリ育む農法推進チーム 矢崎 雅則

兵庫県北部に位置する豊岡市は、水稲栽培が盛んで冬季は多くの降雪がある。国の特別天然記念物であるコウノトリの生息地であり、コウノトリの野生復帰を目指して保護・増殖や生息環境の整備に力を注いでいる。

野生復帰のための研究は平成14年頃からが始まったが、コウノトリのエサとなるカエル、ドジョウなどを増やすためには水田生態系の保全が必要であり、従来の農業生産方式を抜本的に見直さねばならなかった。当初は農家を含め多くの市民がコウノトリに無関心で、集落座談会では「農薬を使わないなんて無理」、「行政はコウノトリが大事か、農家が大事か」などと詰め寄られ、関係者の中でも「農家にリスクを強いて良いのか」という議論が湧き起こった。

しかし、この野生復帰の取組を地域の活性化に活かそうという農家や行政、研究機関の総意のもと、コウノトリが棲める環境づくりを目指した農法の研究開発、推進活動が始まった。



農家による水田の生き物調査

試行錯誤の結果、平成17年に「コウノトリ育む農法」（以下「農法」）の技術を組み立てた。この農法は、“おいしいお米とコウノトリのエサを同時に育む”ことを理念としている。冬期・早期湛水や深水管理、中干し時期の延期からなる水管理技術が特徴であり、水張り期間が非常に長いことで抑草効果と生物多様性の保全を両立している。

さらに、農法の理念を理解するため、農家自らが

水田の生き物調査を行っている。調査を始めた頃、農家は何をすべきか分からない状態だったが、研究者を交えて調査や環境学習を重ねるにつれ、生き物の種類や数が増加し環境が豊かに変わっていくことを実感できるようになった。

一方で、農法の実施年数が経ち、湛水管理による土壌環境の変化や雑草の増加など新たな問題が発生してきた。これらの問題に対しては行政や研究機関、農家が連携して現地調査を進め、問題点を農家から聞き取ったり除草機などを試験したりして、解決策を毎年検証している。

平成20、21年度には、農家自らが他の農家に農法の栽培指導をできるようにするため農法のアドバイザーを30名育成した。その他、普及員や市・県・JA職員の知識・技術向上、農法の理念を周知するための研修会などを開催している。

また、水稲との輪作体系の中で大豆版コウノトリ育む農法が平成18年から始まった。

現在では但馬全域で水稲と大豆合わせ230名391haで農法が実施されており、生産された米や大豆は、兵庫県の「ひょうご安心ブランド農産物」に認証され、人と環境にやさしい農業生産方式（兵庫県では「環境創造型農業」と呼ぶ）で生産した農産物として県内外の量販店等で販売されている。

さらに、それらの米や大豆を使用した酒、まんじゅう、納豆、豆腐、醤油等が開発され、百貨店で販売されるなど農商工連携も進んでいる。

平成17年に人工飼育のコウノトリが放鳥されて以来、現在では全国各地に放鳥コウノトリやその2世が飛び立っている。コウノトリが棲める環境は、そこに暮らす人間にとっても快適な環境である。我々が安心して暮らせる環境を子孫に引き継ぐため、豊岡市全域の農家や関係機関が連携し、地域一丸となってコウノトリをシンボルとした環境創造型農業が推進されている。



コウノトリ育むお米

現地からの便り

GIAHS(世界農業遺産)としての棚田

(社)佐渡生きもの語り研究所 理事
土屋 健一

昨年、佐渡はFAO(国連食糧農業機関)からGIAHS(世界農業遺産)認定をうけました。佐渡島民が先人たちから受け継いで築き上げた、生きものを育む農法や集落に伝わる伝統文化、島全体に広がる多様な田んぼの風景などが認定のポイントになりました。決して棚田という形あるものが認証されたわけではありませんが、佐渡の棚田で生きものを育む農法でお米がつくられているということはGIAHS(世界農業遺産)の多くの要素を含みます。そして5月、自然界では38年ぶりにトキのヒナが巣立ちました。これは、棚田を含めた佐渡の多様な農村環境の中で生きものを育む農法を始めとした佐渡島民の取り組みが、ひとつの証を得たものと考えられます。



佐渡の取り組み、冬みず田んぼ

ただし、このような棚田における農業システムを次世代へ引き継ぐためには、様々な課題に取り組む必要があるのも事実です。近年、佐渡においても農家戸数は年々減少しつつありますが、圃場整備された平野部や比較的傾斜の緩やかな地域では経営の規模拡大が進みつつある一方で、棚田での稲作が中心の集落では農家の減少が農地の耕作放棄へつながる可能性が高いのです。平野部の大規模区画圃場では

耕作希望者が待機しているのに、不整形な山間部の棚田は放棄され既に原野と化している所も少なくありません。また、同じ棚田でも急峻な斜面の棚田が維持されている集落がある一方、耕作放棄が進みつつある集落もあるという地域間格差が存在します。

このような課題に取り組んでいく前提となるのが、棚田とその棚田を維持してきた集落の伝統文化の意義を島民全体で再認識することです。その上で後世へ伝えるための行動を起こすことが必要です。幸い、佐渡にも地元農家がリーダーとなり、学生ボランティアや長期滞在型の旅行者を受け入れるなどの活動を通じて、棚田の維持のみならず、集落全体の活性化に成功している地域もあります。当法人でも今回の世界農業遺産認定を契機に、高齢化が進む山間部の棚田や集落機能の維持のための対策を、その集落にとどまらず佐渡全体で共有すべき課題として認識し行動していくように、佐渡市とともに島民へ向け呼びかけているところです。

これまでは個々の集落単位で農業システムの維持に取り組んできましたが、これからは新しい共同体が必要です。集落と集落が手を結び、そこに消費者や非農家の市民、行政も加わったネットワークを形成すること。また、認証米制度という行政のバックアップによる消費者との連携や実際に棚田に関わる島内外のサポーターたちとの共同作業を継続、発展させていくこと。これらを合わせて、新しい農村コミュニティの創造を目指していきます。そのための大事なステップとして、この新しいネットワーク構想を、佐渡市が作るGIAHSアクションプランの中に反映させることで実現を図っていきます。



ボランティアによる田植え風景

日本の棚田百選紹介

熊本県山都町の「峰棚田」

峰棚田代表 高森 信之

先人達の偉業や歴史が今も脈々と受け継がれて続けている峰の棚田。そこには、伝統の祭りや守り継がれてきた神社があり、そこに暮らす地元住民の思いが息づいている。

今から150年以上前、国指定重要文化財「通潤橋」を手掛けた布田保之助翁が約10kmを開削して作られた「嘉永福良井手」、その布田翁を祀るため作られた「布田神社」、室町時代に作られたと言われる「観音菩薩像」そして、何よりの財産として、歴史ある井手とその水を湛える峰棚田を子孫の代まで受継いで行こうと、昔と変わらぬ生業を続けてきた地元住民の歴史と宝物がここにはある。

峰棚田は、九州自動車道御船インターより国道445号線を東<山都方面>へ約20km、中島小学校入り口交差点を右折、県道稲小野甲佐線の水越方面へ4キロメートルほど清流をぬうように車を走らせ、旧中島南部小学校前から約500m程登ると峰集落の先に峰棚田が広がる。

水田面積は約28haを有し、中山間地域直接支払に伴う集落協定を地域活動の中心に置き、営農面では地域内にいくつかの部会を立ち上げ、各部会毎に取組みを行っている。

平成14年度に機械倉庫を建設し、畦塗り機・トラクター・バックホー・ライムソワー・水稻播種機・苗箱洗浄機・苗箱土入機・土混ぜ機・高圧動墳・マウントカッターを購入し、「機会部」により利用を図ってきた。平成17年度には、機械利用組合の設立を行い、機械倉庫を新設した。

「農道部」は、圃場への進入道整備のため、毎年400～500mの道路舗装を行い、道路周辺の草刈り作業を毎年2回程実施している。

「水路部」は、嘉永福良井手や隋道の水路などの管理を行っており、水路の掃除を年1回、水路周辺の草刈り作業を毎年2回程度行っている。また、平成13年から毎年200m程、小用水路のU字溝設置を行っている。

「女性部」では、七夕祭りの復活・伝承、ホウ酸団子の製造配布、石鹼作り講習、パソコン講習、加工食品の掘り起こし研究や家庭菜園講習会などを行い、農産物の加工・販売の検討や生活環境の整備を行っている。

また、山都町の「八朔祭」では、野菜や加工品の

販売を行い、消費者との交流も図っている。

集落環境の整備では、水田に菜の花の植栽を始め環境の美化と共に交流の場として活用され「青年部」の企画・立案により、集落住民全員が参加し、一面に咲く菜の花を眺め料理をつまみながらゆっくりと過ごす「菜の花まつり」を開催している。また、2月には法面の野焼きも行っている。

近年、イノシシの被害が増加しているため、鳥獣害対策班を作り、国の事業等を活用し、ワイヤーメッシュの設置や電気柵の共同設置を実施すると共に、箱ワナ等の免許も取得し、捕獲にも力を入れている。

水田枚数400枚、集落戸数21戸・66名、高齢化率27パーセントの村だが、まだまだ元気な集落である。

事務局ニュース

■2012年度棚田学会大会のお知らせ

日時：2012年8月5日（日）

場所：三越劇場（日本橋三越本店6階）

- ◆棚田学会総会 11:00～12:00
- ◆棚田学会賞授賞式典 13:00～13:40
- ◆シンポジウム 14:00～17:45

「棚田と民俗～人々のくらしと棚田～」

講演1「棚田と民俗文化～日本の原風景とは何か～」

小川直之 棚田学会理事／國學院大學文学部教授

講演2「棚田のくらしを支えたもの」

大楽和正 新潟県立歴史博物館主任研究員

講演3「棚田のわざ～福岡県星野を中心に～」

段上達雄 別府大学文学部教授

講演4「農村の伝統芸能の行方」

星野 紘 神奈川大学歴史民俗資料学研究所講師

パネルディスカッション

司会：斉藤裕嗣 棚田学会理事／東京文化財研究所
客員研究員

パネラー：小川直之、大楽和正、段上達雄、星野紘

- ◆懇親会 18:00～20:00

■編集後記

棚田学会が発足して、早いもので8月でまる13年になります。学会発足の1999年、都会のほとんどの人が「棚田ってなに？」と言う中、日本橋三越本店で「きみは棚田を見たか！棚田パノラマ体験展」が開催されました。いま、「棚田、里山は日本人の財産」と多くの方が提唱します。棚田は自然とは違います。そこにはくらしがあります。会長中島峰広著「棚田 その守り人」が古今書院より発行されました。山形から鹿児島まで、公共交通のみを使い、訪ね歩いた記録です。棚田で生きる人々が描かれています。是非読んで頂きたい1冊です。（高橋）

棚田写真集

滋賀県高島市の「畑の棚田」

苗待ち



冬霧の山里



写真提供：滋賀県高島市

棚田めぐり —第5回 熊本県山都町の棚田—

山都町内では、「菅棚田」と「峰棚田」が平成11年度農林水産大臣選定の「日本棚田百選」に選定され、更に平成22年2月に「通潤用水と白糸台地の棚田景観」が全体が国の「重要文化的景観」に選定されました。この10月19日～20日に第18回棚田サミットが開催される。参加者に、菅棚田・峰棚田・白糸台地の棚田・通潤橋等、山都町の景観をご覧いただき、意見交換を通じて未来に向けた棚田保全を考えます。

(写真提供：熊本県山都町)



「白糸台地の棚田」



「通潤橋と彼岸花」



「菅棚田」



菜の花畑の「峰棚田」